

## 隴山地域青銅器文化の変遷とその特徴

宮本，一夫  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：教授：東アジア考古学

<https://doi.org/10.15017/1145>

---

出版情報：史淵. 139, pp.143-175, 2002-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 隴山地域青銅器文化の変遷とその特徴

宮 本 一 夫

はじめに

嘗て内蒙古中南部以東の長城地帯の青銅器文化について、その地域的な特徴と地域ごとの変遷、ならびに地域を横断する青銅器の編年を示したことがある<sup>(1)</sup>。その際、内蒙古中南部以西の青銅器文化については、紙面の都合上細かく触れることがなかった。本稿では、オルドス地区以西の隴山地域の青銅器文化について詳しく検討してみたい。なお、ここで言う隴山地域とは甘肅東部から寧夏南部にかけての長城地帯西部地域を指している。

さて、前論文で既に述べたように、墓葬構造からみた場合、隴山地域は洞室墓が主であり、内蒙古中南部から燕山山脈にかけては豎穴土壙墓であり、地域的な違いが認められる。ところが、青銅器の器種構成などからみれば、隴山地域から内蒙古中南部には類似性が認められるのである。こうした指摘は許成や李進増の論文にも認められる<sup>(2)</sup>。許成らの論文では、内蒙古中南部の毛慶溝墓地と隴山地域の楊郎墓地を比較し、両者の類似性を指摘すると共に、後者の地域の特徴を示している。それによれば、楊郎墓地には有蓋斧、竿頭飾、鹿形立体獸形飾、広葉刃長柄矛が存在し、隴山地域の青銅器文化の特色となることを指摘している。ところで、隴山地域といっても、

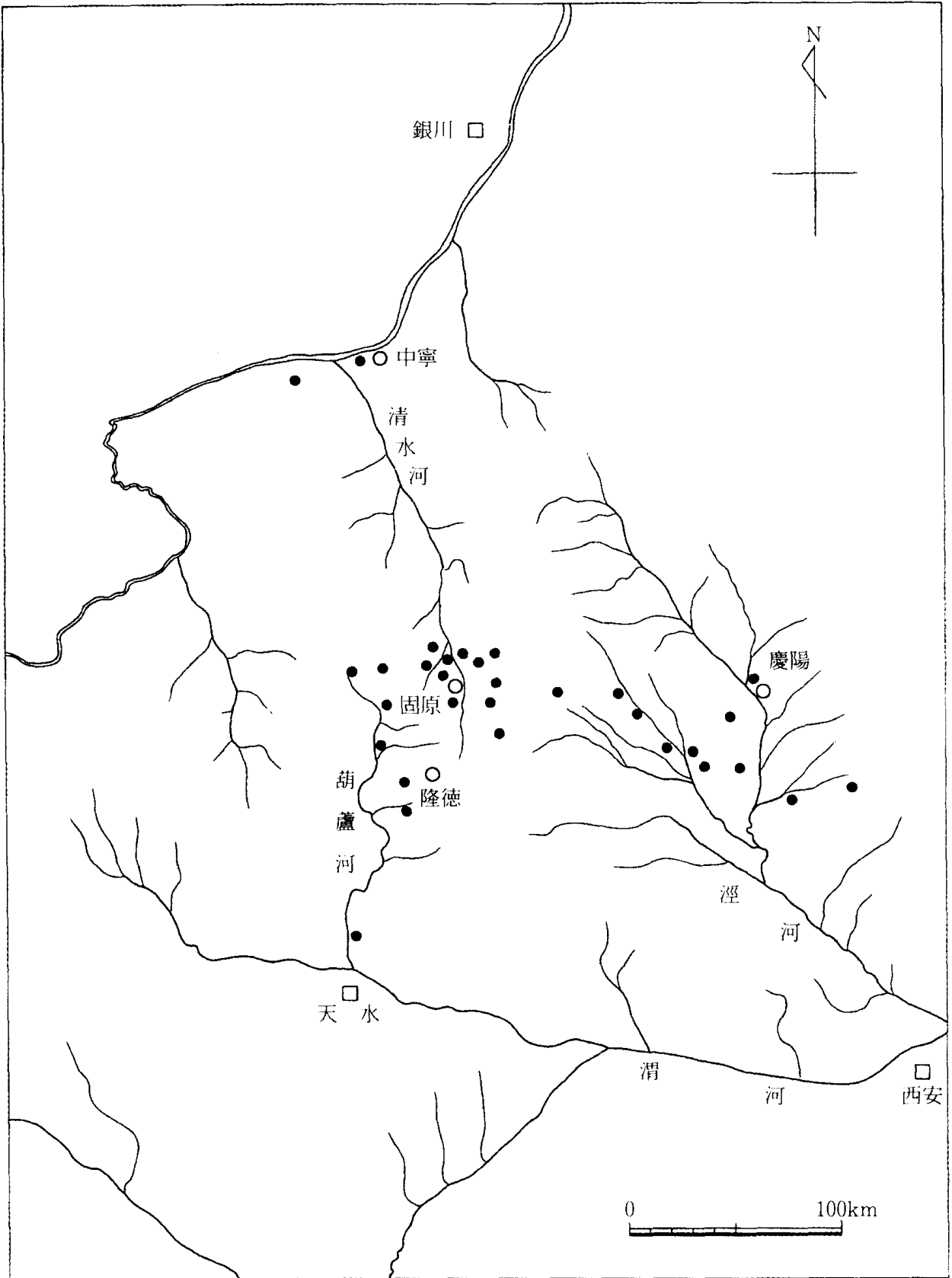


図1 隴山地域における青銅器時代墓地の分布

地域内でさらに細かな地域差や政治的なまとまりがみられる可能性もあろう。羅豊も文献にみられる春秋時代における西戎諸部族の地理的位置の比定を試みている。<sup>(3)</sup>『史記』匈奴列伝によれば、西周には犬戎がこの地域を占拠し、西周末に申侯とともに周の幽王を滅ぼしたとされる。また、春秋中期の秦穆侯の時、西戎八国が秦に服従したとされる。西戎は八部族からなり、隴山の西には緜諸、緄戎、翟、獫狁が存在し、涇河上流域すなわち隴山以東には義渠、大荔、烏氏、胸衍が存在していた。こうした諸部族の居住範囲も現在問題になっている地域に相当しよう。<sup>(4)</sup>ところで甘肅省東部から寧夏南部においては、図1に示すように、この地域の青銅器文化の遺跡は、涇河上流域の慶陽と清水河上流域の固原地区、葫蘆河流域の隆徳地区、さらに清水河下流域から黄河に合流する中寧を中心とする四地区に分けることができる。本稿では、まずこれら四地区の実体から検討することにした。

## 一、慶陽地区

西周期の遺跡として、慶陽県韓家灘廟嘴で西周墓一基<sup>(5)</sup>、寧県寧村で西周墓一基<sup>(6)</sup>、寧県焦村西溝で西周墓一基<sup>(7)</sup>がこれまで発見されている。その他、合水県西華池公社兔兒溝林場<sup>(8)</sup>、正寧県西坡公社楊家台<sup>(9)</sup>、寧県湘楽公社玉村<sup>(10)</sup>で西周墓が発見されている。また、鎮原県太平公社徐湾<sup>(11)</sup>では春秋中期の鼎を持つ墓葬も出土している。西周期には近接する霊台県白草坡<sup>(12)</sup>において西周前期から中期の墓地が存在し、西周の貴族墓と考えられている。白草坡の存在や慶陽地区発見の西周墓の存在からも、少なくとも西周前半期には慶陽地区は、周王朝の支配範囲に組み込まれていたと考えるべきであろう。そこで問題とすべきは東周代の青銅器文化の動向である。慶陽地区の北方式青銅器に関する墓葬単位の一括遺物から検討してみたい。

ところで、一九九九年一〇月に、私は大手前大学文学部秋山進午教授と東京大学大学院人文社会系研究科大貫静夫助教授と共に、西峰地区博物館を訪れ、慶陽地区青銅器を実見することができた。とくに、一括遺物である

正寧県後莊<sup>(13)</sup>の墓葬資料を実測することができた。まずその内容を紹介し検討することから始めたい。後莊の資料は、墓葬とそれに伴う葬馬坑から成り立つ。墓葬と葬馬坑においてそれぞれどの遺物がどれほど出土したかは明確ではなく、ともかく墓葬と葬馬坑を併せた一括資料という認識で、これらの資料を取り扱いたい。

図2・3に後莊の実測図を提示する。銅戈は二点出土しており、1は上蘭部分に穿を持たない殷末期から西周前半期のもの。2は援が小振りでそれに比して胡や内が長い形態的特徴を示すもので、戦国中・後期のものである。3・4は青銅斧であるが、前者は両刃であり、後者は片刃である。どちらも片持たせ孔を持つところに特徴がある。3は概報に記載がないが、墓葬

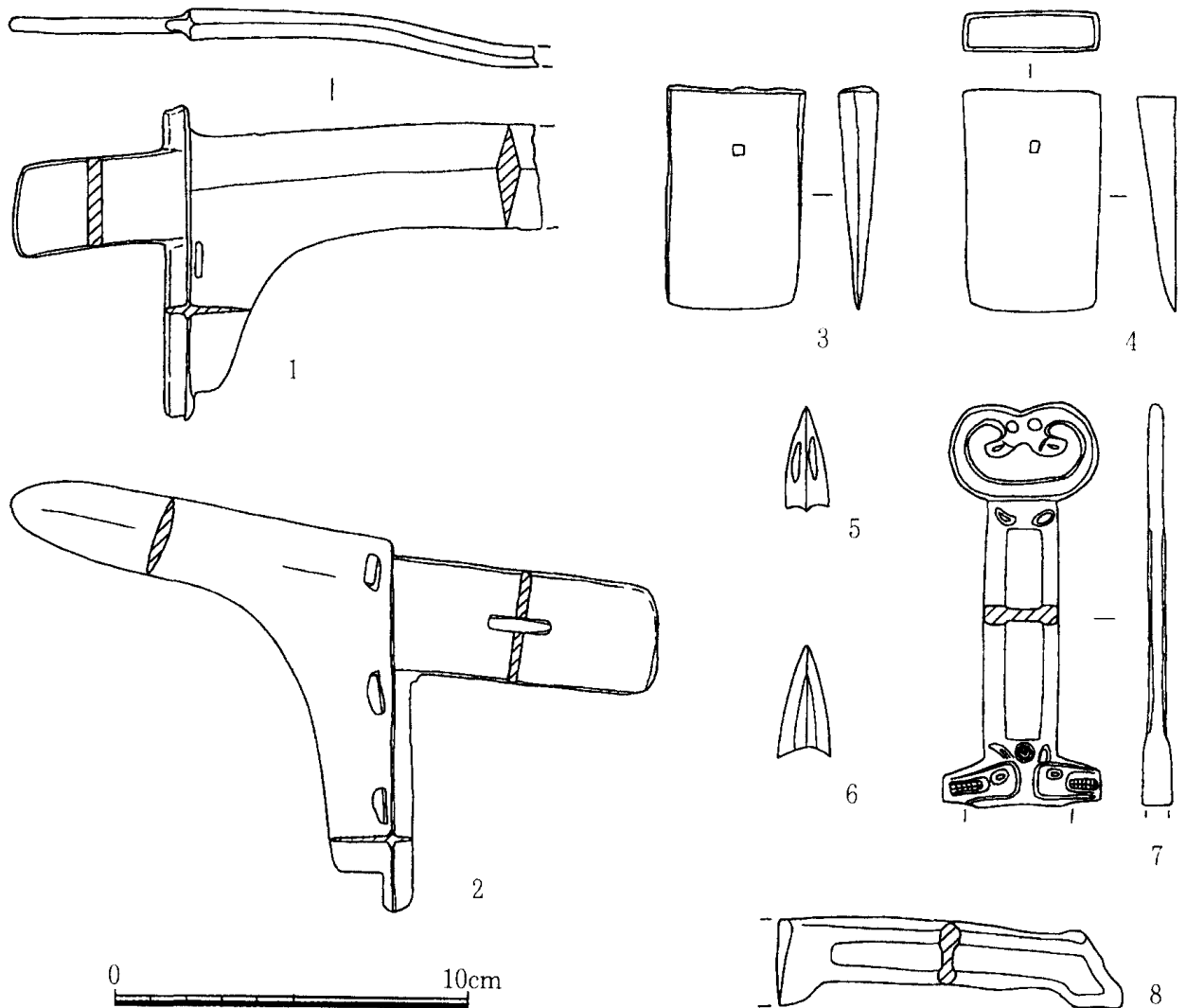
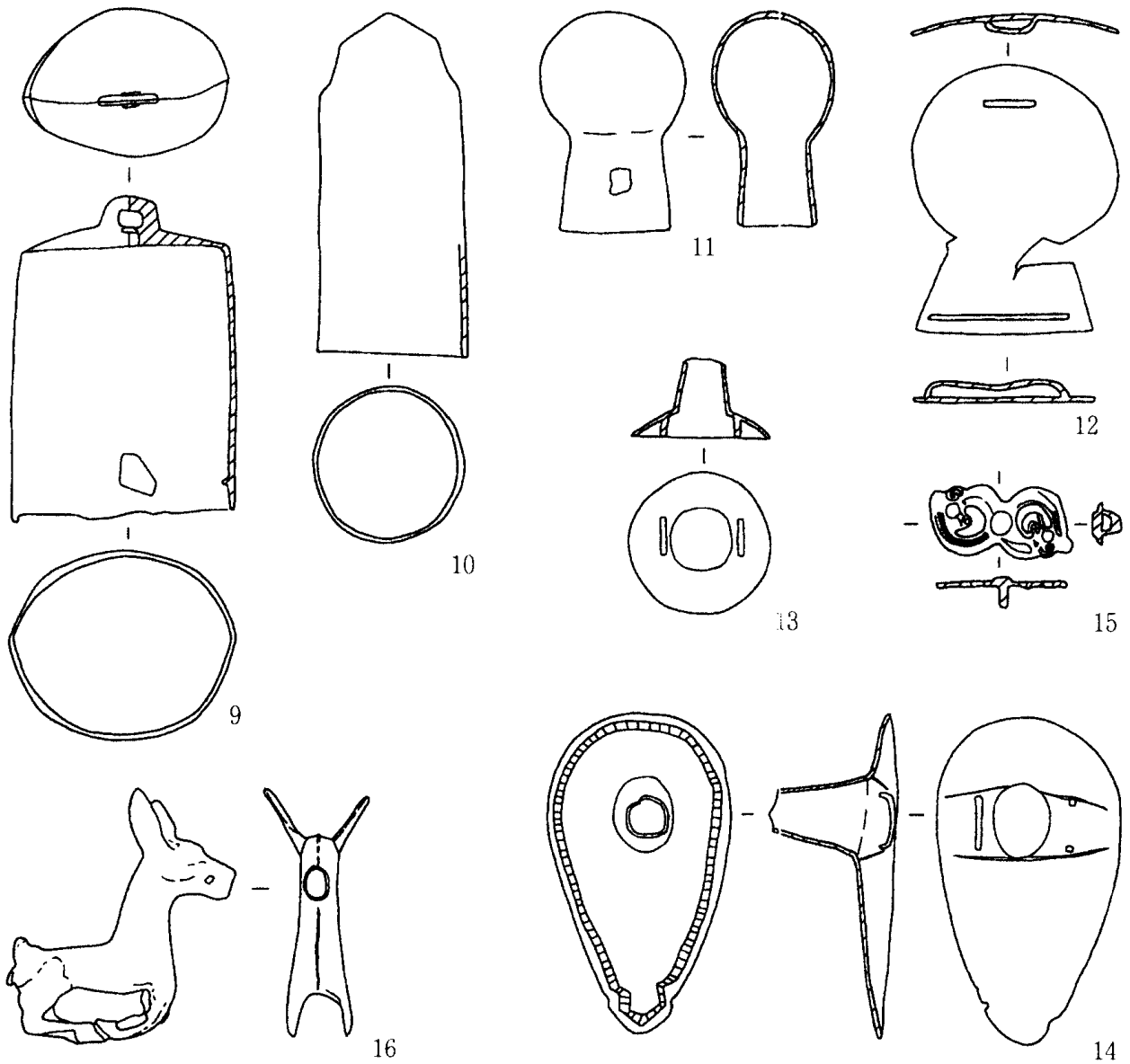


図2 後莊出土青銅器 (1) 縮尺1/3

出土のものである。5・6は三稜鏃である。概報にはその記述がないものであり、本墓葬出土のものであるか確証がない。7は銅柄鉄剣で鉄剣部分は折れてなくなっている。把頭飾は双鳥文意匠を意識されているが、鳥の目の部分や嘴部分が既に幾何学文様化しており、具象性を消失している。劍格（鏑）部分には背を向かい合わせた獣頭が描かれている。概報では双魚文と考えているようだが、犬などの獣頭であるともみるべきであろう。8の刀子は刃部が折



0 10cm

図3 後荘出土青銅器(2) 縮尺1/3

れているが、柄の断面形は縁が肉厚で中央部分が扁平な形態を呈しており、銅柄鉄劍の柄の断面形も同じ形態を示している。9は銅鈴である。内面突帯をもっており、実用の鈴であろう。型持たせ痕が胴部の内側に四つ認められ、そのうち一つは貫通している。鈕の下の舞部分には孔が開いており、これも型持たせ孔である。10・11は竿頭飾である。どちらも本来は車馬具であり、10は車馬具の車軸頭に飾られる書であるが、本墓葬から一点しか出土していないことから言えるように、既に車馬具の概念が消失している。13・14は凸管形飾と呼ばれるものである。13がⅠ式、14がⅡ式として概報では区分されている。13のⅠ式は十一点あり、14のⅡ式は八点出土している。13は円形の泡状銅飾りの中央部が管状に突出するものであり、裏側には紐を通すための留め金が二つ溶接されている。14は楕円形の円盤の一方に管状の突出があるものである。表面には毛彫り状の文様帯があり、表面には錫メッキが認められる。錫メッキも北方式青銅器文化の一つの技術的特徴である。裏面には円形突出部の両側にやや内すぼまりの平行する微突線が認められる。型の范線である。突出部の内范を固定するために工夫された分割范の痕跡を残すものと考えられるが、こうした范線は内蒙古中南部の戦国期後半の帯鉤の裏面にも認められ、同じような技術的な基盤が存在する可能性がある。14の裏面にも紐を通す留め金が二つあるが、その内の一つは既にはずれていた。15は帯飾りである。概報には凶面や写真が載せられていない。中心の円点文を中心に点対称の二匹の獣文が意匠されている。獣文の具象性が既に失われているが、後に述べる袁家の帯飾りと比較すれば、この獣文は本来龍を意匠していたものが変形したものと考えられる。16は隴山地域の青銅器文化に特徴的な立体獣形飾である。鹿を象ったものである。以上のような青銅器群は、後に他の墓葬一括遺物との比較によって位置づけが鮮明になるが、青銅戈の年代からは戦国中・後期に相当する墓葬と考えられる。

こうした後荘出土遺物の観察結果を踏まえ、以下、慶陽地区の墓葬一括遺物を相対的に比較してみたい。慶陽地区で春秋戦国墓として報告されている事例は、後荘以外には、慶陽県馬寨、鎮原県廟渠、慶陽県場頭、鎮原県

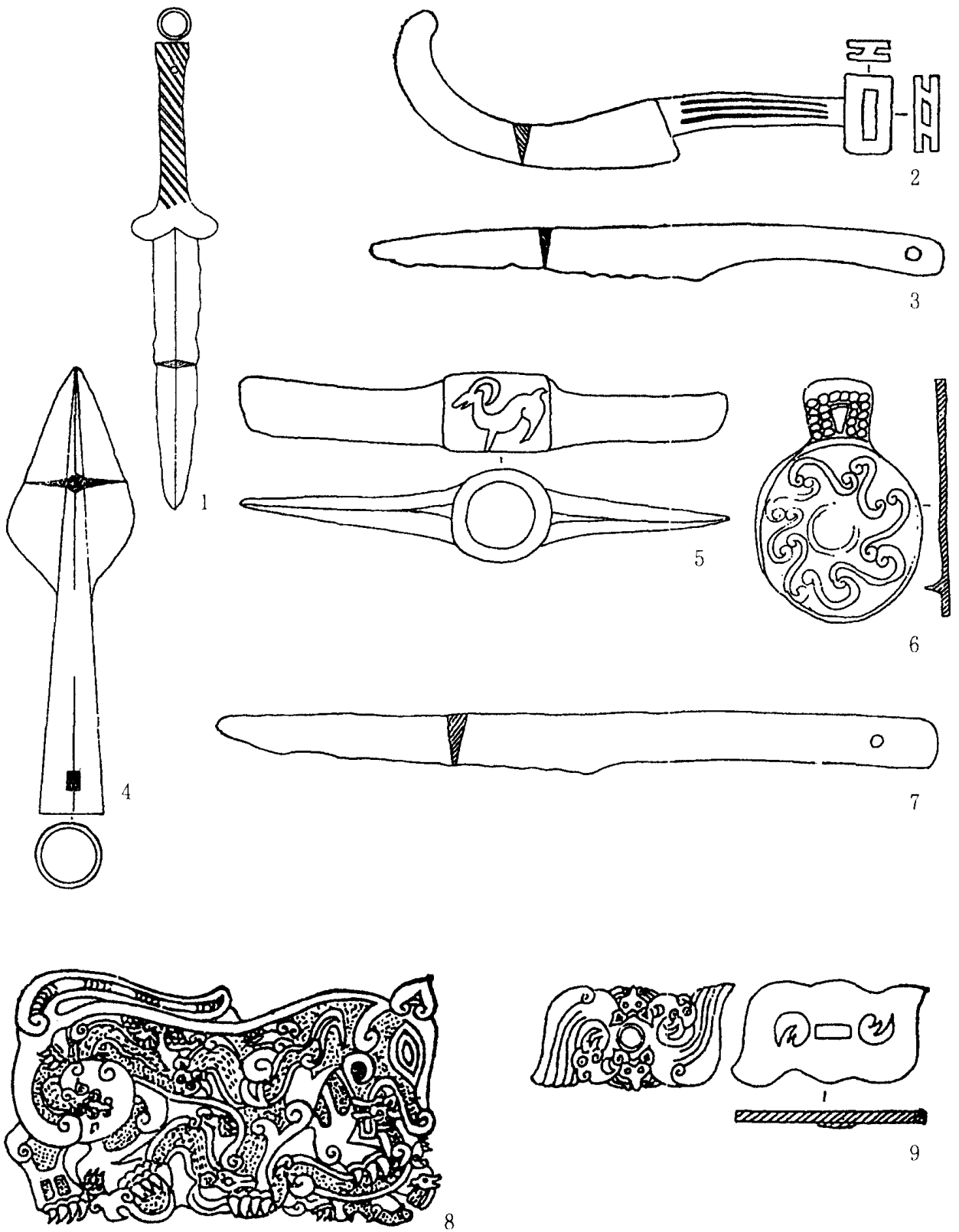


図4 慶陽地区出土青銅器(1)  
 1~3:馬寨 4~7:廟渠 8・9:塬頭(1縮尺1/5、8・9縮尺1/2、  
 その他縮尺2/5)



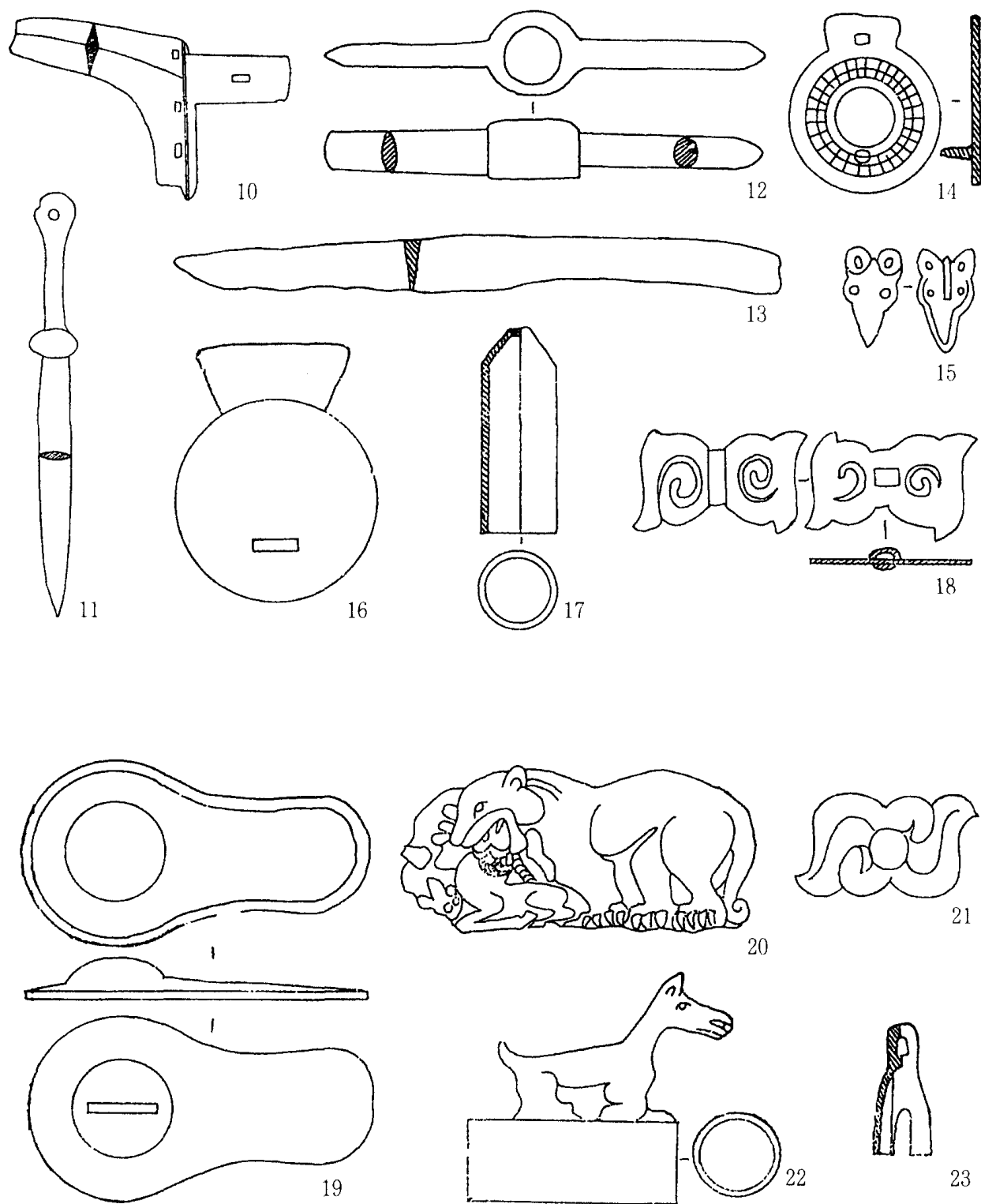


図5 慶陽地区出土青銅器(2)  
 10~18: 紅岩 19~23: 吳家溝圈 (10・11・16・17縮尺1/5、その他縮尺2/5)

紅岩、鎮原県呉家溝圈、寧県平子郷袁家が挙げられる<sup>(14)</sup>(図4~6)。これらの相対年代や絶対年代を決定するためには、青銅器の年代観が既に確定している他地域の年代観を基にするのが最も簡易な方法である。既に指摘しているように慶陽地区の青銅器と内蒙古中南部の青銅器は同一の文化様式を呈している。既に内蒙古中南部の青銅器編年<sup>(15)</sup>に基づいて慶陽地区の青銅器の年代観を示してみたい。年代の基準となる遺物としては、鳥形鉸具と獸頭形飾り金具が挙げられる。鳥形鉸具の場合、廟渠のもの<sup>(6)</sup>の方が紅岩のもの<sup>(14)</sup>より文樣的に複雑であり、相対的に古い時期のものの可能性がある。紅岩の鳥形鉸具は二重の穀粒文に近いA1式であり、涼城地区編年I期に相当するものである。獸頭形飾り金具<sup>(16)</sup>は内蒙古中南部の桃紅巴拉1号墓<sup>(16)</sup>のものと

隴山地域青銅器文化の変遷とその特徴

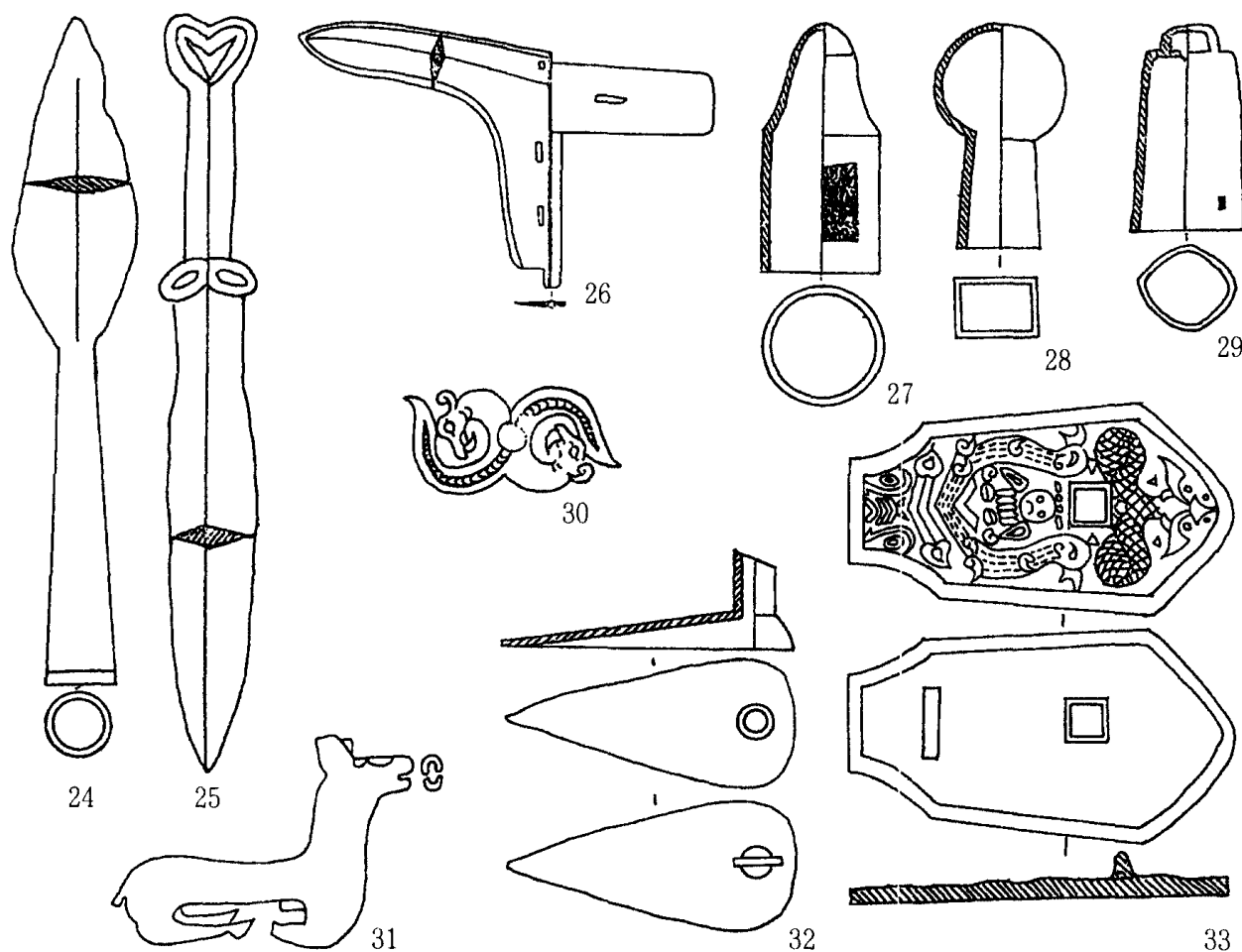


図6 慶陽地区出土青銅器(3)  
24~33: 袁家(24・27・32縮尺1/5、その他縮尺2/5)

同じであり、桃紅巴拉1号墓も涼城地区編年Ⅰ期と考えた。したがって、紅岩を内蒙古中南部青銅器編年Ⅰ期で春秋後期前半のものと考えられる。鳥形鉸具から紅岩に遡ると考えた廟渠は、管状飾りなど涼城地区編年Ⅰ期以降に認められない器種をもっており、紅岩より古い要素を示している。さらに古い要素を示すものに、馬塞が挙げられる。馬塞には銅劍(1)が副葬されているが、この銅劍の柄は中空であり、燕山地域でA3式とした西周後期に遡る銅劍の特徴を示している<sup>(17)</sup>。また、馬塞で共伴している銅刀子(2)は刃部の先端が巻き上がるタイプのものであり、さらに柄頭が方形を呈するものである。こうした特徴を示す銅刀子は、張家坡の西周期の住居址出土のものと同じである。また、山西省天馬曲村七〇一六号墓出土のものと同じであり、この墓は副葬土器がないため西周と春秋期と細かな時期区分の判断ができない。張家坡西周住居址出土例からみれば馬塞のものを西周後期と考えることが妥当であり、慶陽地区での北方式青銅器墓として最も古い段階に近いものであろう。紅岩の渦文飾り(18)より具象的な点対称の双鳥文からなる飾り金具(9)が場頭から出土している。場頭の方が紅岩より古い段階の墓葬であると考えるべきであろう。したがって、廟渠と場頭は春秋前期から中期のものであると考えるべきであろう。一方、紅岩より新しい段階のものとしては、立体獸形飾(22)が認められる呉家溝圈が挙げられよう。内蒙古中南部のオルドス地区・河套地区では涼城地区編年Ⅳ期から立体獸形飾が認められるが、これが発達する慶陽地区は年代的にそれに先行するであろう。しかも呉家溝圈の立体獸形飾(22)は、具象的な鹿の造形とともに、竿頭飾のように罌部をもち柄を差し込むことができるものである。一方袁家のもの(31)は、やや粗雑化した鹿の意匠とともに罌部が存在せず、慶陽地区に一般的に見られるものである。これを定型的な立体獸形飾と呼ぶことができるであろう。袁家では立体獸形飾(31)とともに凸管形飾(32)などこれまでの副葬品の構成にないものが認められる。袁家からは鉄矛(24)もでており、比較的新しい段階のものであることが想像される。内蒙古中南部でも武器が鉄器化するのには涼城地区編年Ⅳ期以降であり、袁家段階から涼城地区編年Ⅳ

期に相当すると考えておくべきであろう。先に検討した後荘において、その帯飾り（図3—15）は明らかに袁家のもの（30）より具象的な意味を喪失した退化型式であり、後荘の方が袁家より年代的に新しいとすることができよう。共伴する中原系の戈の型式も袁家の方（26）が若干古いものである。袁家を戦国中期とするならば、後荘は戦国後期まで下るものであるかもしれない。ともかく袁家以降武器の鉄器化が進むと共に、凸管形飾のような内蒙古中南部には認められない新しい器種が出現している。さらに、双鳥文飾りの系譜を引くと考えられる双龍文の帯飾り（30）が新たに出現するのである。

慶陽地区の墓葬の特徴としては、墓壙とともに葬馬坑を持つところに特徴が見られる。こうした墓葬は紅岩、袁家、後荘でも認められる。紅岩に既に墓壙と葬馬坑が区分された状態で墓葬が形成されていることから、こうした墓葬は涼城地区編年Ⅰ期に既に存在していることになる。この他、慶陽県五里坡<sup>(20)</sup>に於いても葬馬坑が発見されている。ここから出土する遺物にはAⅠ式の鳥形鉸具も出土しているが、銅柄鉄剣や定型化した銅鈴が認められる。後二者の型式の特徴は、涼城地区編年Ⅳ期以降に出現するところから、この葬馬坑は戦国中期と考えられる。しかも葬馬坑には馬甲飾も認められ、豪華な装具が存在していると考えられる。この他、涼城地区編年Ⅳ期Ⅴ期の墓葬として袁家や後荘が考えられる。墓壙と葬馬坑から成る墓葬が発達するのが、戦国中期以降とすることができよう。墓壙と葬馬坑からなる墓葬は、副葬品の多さから見ても階層上位者の墓と考えることができ、階層構造の分化が春秋後期の涼城地区編年Ⅰ期から始まり、戦国中期の涼城地区編年Ⅳ期には、階層構造の分化がより加速したと理解することができるであろう。

## 二、固原地区

固原地区で比較的まとまった墓葬資料が報告されている北方式青銅器墓地に、於家庄墓地<sup>(21)</sup>と楊郎墓地<sup>(22)</sup>がある。

この両者の墓地を比べれば、楊郎墓地には副葬品に鉄器が含まれるのに対し、於家莊墓地の副葬品には鉄器が含まれないことから、前者の方が後者に比べ相対的に新しい傾向にある。そこでまず相対的に古いと考えられる於家莊墓地(図7・8)の検討から始めることにしたい。

於家莊墓地は、北区、中区、南区の三区に墓地が区分されている。ほぼすべての墓葬に牛頭骨、馬頭骨、羊頭骨が供献されている。また、中区の場合、洞室墓が多い傾向にある。これら三区の内、墓地の配置などの詳しい内容が分かるのは中区である。この中区の墓葬間の相対的な年代を比較してみたい。ここでも副葬品の年代観を基準に相対的な年代差を決定するが、その副葬品の年代観は涼城地区編年に基づく。

涼城地区編年Ⅰ期に相当するものが中区17号墓である。鳥形鉸具(5)は三重に円点文が巡るもので、鉸具の型式としてはA1式にあたり、涼城地区編年Ⅰ期に相当している。伴出する中原系の戈は、長城地帯に共伴する例としては古いものであるが、その年代は春秋後期以降のものであり、問題はない。涼城地区編年Ⅱ期に相当するのが中区15号墓である。鳥形鉸具(9)は渦文が巡るものであり、鉸具B2式にあたり、涼城地区編年Ⅱ期に相当する。涼城地区編年Ⅲ期に相当するのが、中区14号墓である。ここからは、中原系の帶鉤(15)が出土しているが、この型式は涼城地区の毛慶溝4・58号墓<sup>(23)</sup>出土のものと同じ型式であり、涼城地区Ⅲ期のものである。涼城地区Ⅳ期に相当するのが中区11号墓である。鳥形鉸具(19)は帶鉤の影響を受けて鉸具の鳥形尾部が既に変形し、そこに留め金が付くタイプに変化しており、鉸具E式に相当する。また、伴出する渦文飾り(18)は、涼城地区Ⅲ期の於家莊14号墓のもの(14)に比べ、文様が線状化し、文様構成も簡略化している。この渦文飾りからも中区14号墓より新しい段階のものであるといえ、涼城地区編年Ⅳ期に相当することは問題がない。また、中区11号墓で共伴している双龍文帶飾り(17)は、慶陽地区の袁家のもの(図6-30)に比較的近い文様意匠を示しており、年代的にも近いといえることができる。袁家を慶陽地区の編年観に於いて涼城地区編年Ⅳ期と考えたこ

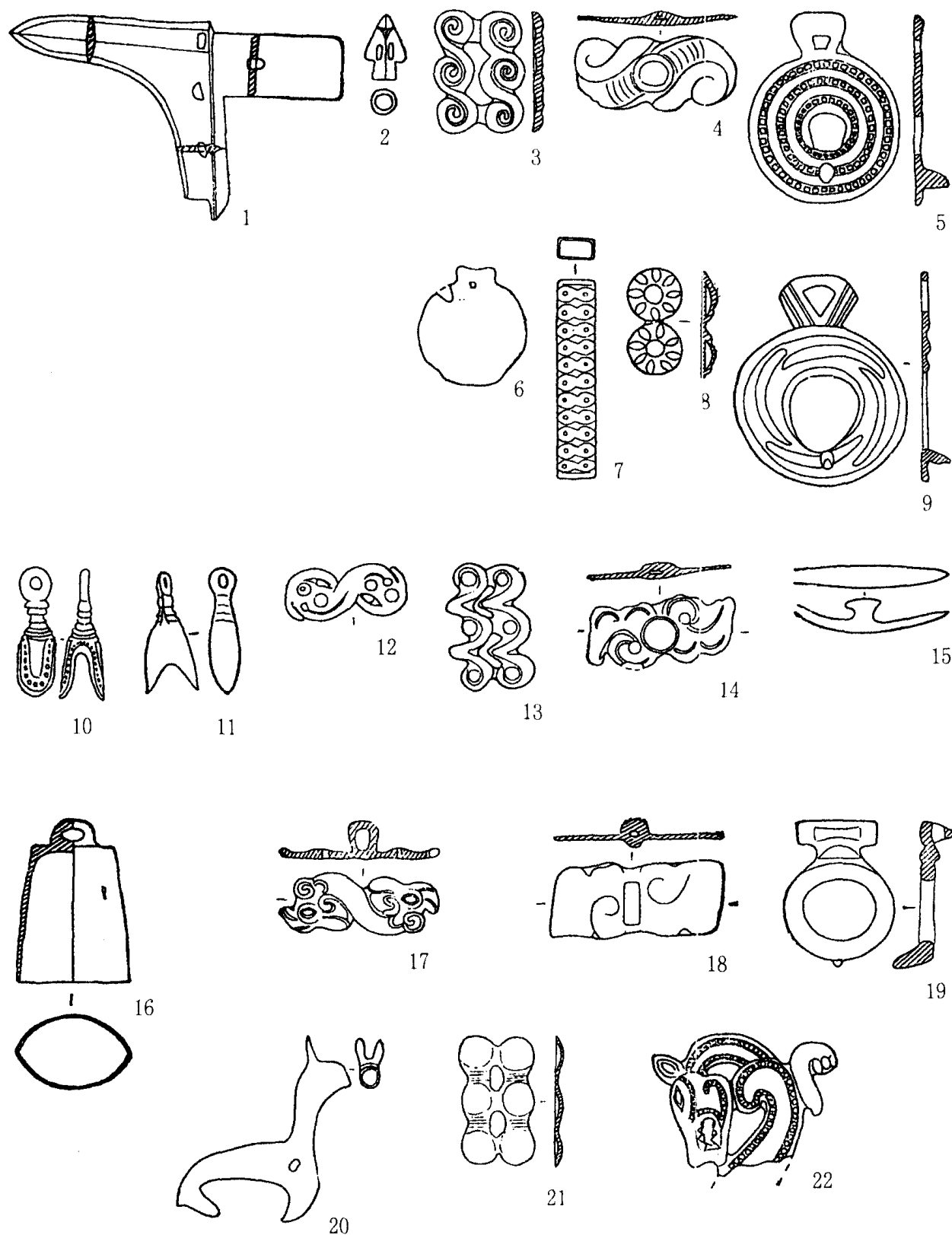


図7 固原地区出土青銅器(1)

1~9: 於家莊中区17号墓 6~9: 於家莊中区15号墓 10~15: 於家莊中区14号墓 16~19: 於家莊中区11号墓 20~22: 於家莊中区5号墓 (1縮尺1/5、その他縮尺2/5)

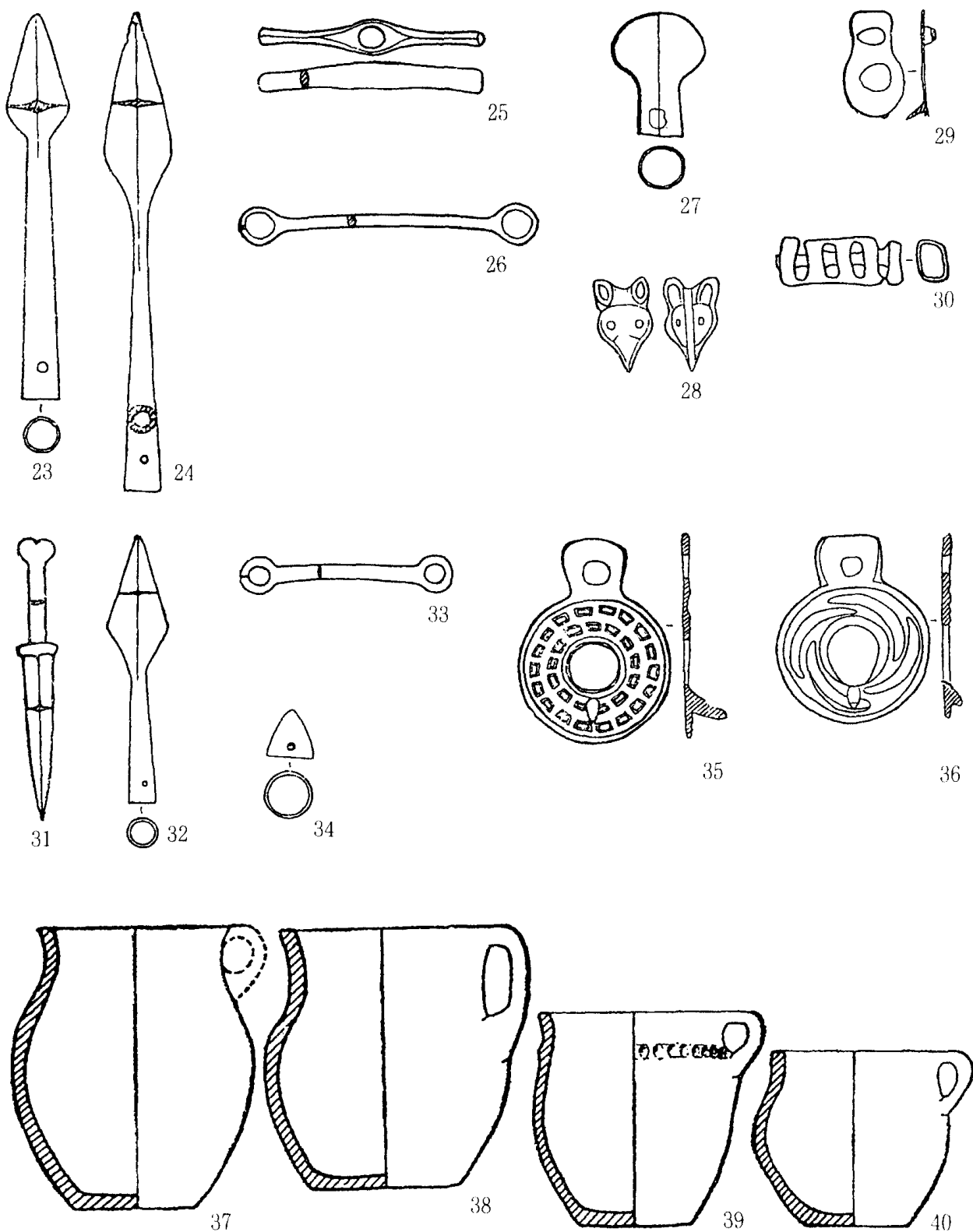


図8 固原地区出土青銅器(2)

23~30: 於家莊南区5号墓 31~36・38: 於家莊墓北区2号墓 37: 於家莊中区17号墓 39: 於家莊中区10号墓 40: 於家莊中区5号墓 (23~26・31・32・34縮尺1/5、27~29・33・35・36縮尺2/5、37~40縮尺1/4)

とと、中区11号墓の年代比定において矛盾が存在せず、妥当な年代観を示していると言えよう。鹿形立体獸形飾(20)をもつ中区5号墓は、慶陽地区の袁家や後莊の例から見ても、涼城地区編年Ⅳ期以後のものであろう。中区5号墓から出土した連珠状飾り(21)は、既に渦文を失っている。渦文の退化過程からすると、中区17号墓(3)、中区14号墓(13)そして中区5号墓(21)という型式変化が辿れ、先の相対的年代観に合致している。

この他、鳥形鉸具E式(29)が出土している於家莊南区5号墓も涼城地区編年Ⅳ期に平行するものと考え、ここからは比較的古い段階に特徴的な獸頭形飾り(28)も共伴している。これを伝世したものと解釈すれば、その他に共伴している竿頭飾(27)などは涼城地区Ⅳ期段階のものであり、年代観に矛盾はない。また、北区2号墓からは、鳥形鉸具A1式(35)とB2式(36)が共伴している。鳥形鉸具B2式の年代観からすれば涼城地区編年Ⅱ期に相当する。さらに、この墓葬には銅劍が副葬されているが、この銅劍の把頭飾は既に双鳥文が退化したものであり、型的的に涼城地区編年Ⅲ期まで年代が下る可能性もある。

さて、北区2号墓と中区5号墓からは副葬された土器が発見されている。土器が副葬された墓葬としては、この他中区17号墓と中区10号墓が知られる。中区17号墓は涼城地区編年Ⅰ期に、北区2号墓は涼城地区編年Ⅱ期に、中区5号墓は涼城地区編年Ⅳ期以降に相当すると考えられた。こうした年代観に基づいて土器の型式的变化方向を眺めれば、同じ把手付罐として捉えられる土器系譜に於いて、壺状に口縁がすぼまる中区17号墓(37)から口縁のすぼまりが弱まり直口気味になる北区2号墓(38)、さらにこの系譜が小型化する中区5号墓(40)という変化が追える。さらに副葬品からは明確な年代観が決めたい中区10号墓の副葬土器(39)は、北区2号墓の直口気味の罐がさらに直立して小型化するものであり、北区2号墓と中区5号墓の中間に位置する土器型式と位置づけできる。したがって、中区17号墓、北区2号墓、中区10号墓、中区5号墓という順に土器が変化していることができる。以上のように、土器型式の変化からしても、これまでの年代観が妥当であることを示している



とすることができよう。

こうした年代観が妥当なものであるとするならば、春秋後期前半の前六世紀に相当する於家莊中区17号墓の段階から既に洞室墓が存在することになり、固原地区の墓葬の地域的習俗が比較的古い段階に既に確立していたと言うことができる。また、この段階に中原系の戈(1)が出土していることは、この段階に既に中原との何らかの接触が生じていたことを物語っている。なお、三宅俊彦は、固原地区のこの段階に内蒙古中南部の人々が固原へ移動し、その後に洞室墓を営む人々が固原地区へ再移動した<sup>(24)</sup>と考えている。しかし、慶陽地区の西周後期の馬寨の例からみても、基本的に言って、長城地帯における商代の北方式青銅器文化の延長線に隴山地域の青銅器文化が成立した<sup>(25)</sup>と考えるべきであろう。また、固原地区にみられる洞室墓は、前代に於いて姜戎文化の劉家遺跡<sup>(26)</sup>などにみられる洞室墓が、伝統的な習俗として固原地区に在地的に存続しているものと考えられるべきではなからうか。

次に、相対的に於家莊墓地より年代的に後出する可能性があると思定した楊郎墓地(図9、11)について検討してみたい。楊郎墓地は第一地点から第三地点までの三区に墓域が区分されている。この中でも、比較的副葬品がそろって出土している第一地点の墓葬をまず比較検討してみたい。この場合も、涼城地区編年を基準にして、特に絞具の型式を中心にしながら、副葬品の年代観から、墓葬の相対年代を決めることにする。

楊郎墓地で最も古い段階と考えられるのは、旋渦文からなる鳥形絞具B2式(6)が出土している8号墓である。B2式絞具は涼城地区編年II期に属する。4号墓出土の同じく旋渦文からなる円形飾金具(12)は、涼城地区編年II期に属するものである。4号墓の銅劍(7)も双鳥文の意匠が獸頭が相向き合うものに変形しているが、年代的には矛盾がないであろう。涼城地区III期平行とすべき明確な墓葬は楊郎墓地第一地点にはみあたらないが、3号墓の鳥形絞具(18)は文様が無文化しており、この段階の可能性が高いと思える。この他、渦紋飾(14・

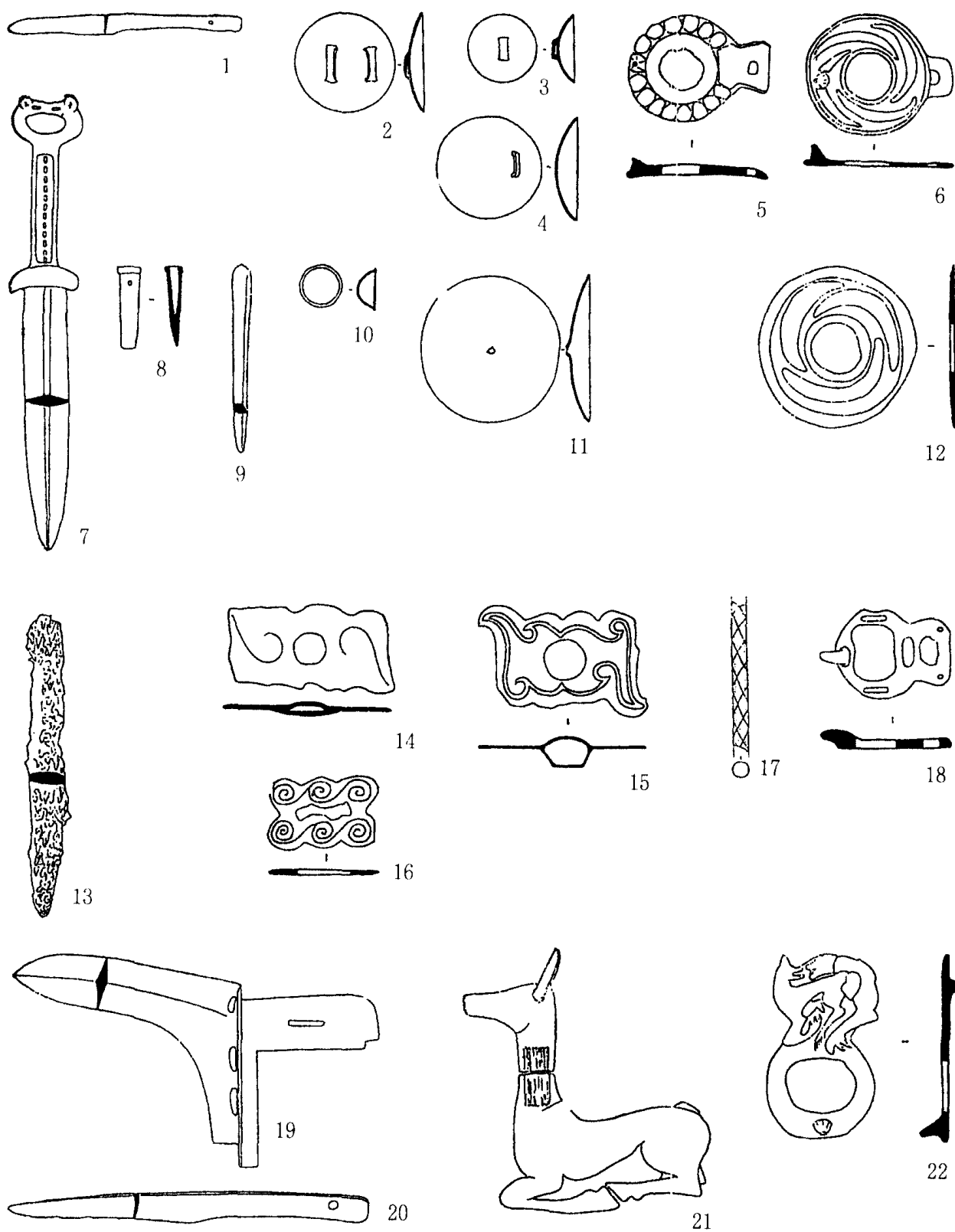


図9 固原地区出土青銅器(3)

1~6: 楊郎第1地点8号墓 7~12: 楊郎第1地点4号墓 13~18: 楊郎第1地点3号墓 19~22: 楊郎第1地点1号墓 (1~4・7・8・10・11・13・19・20縮尺1/5、その他縮尺2/5)

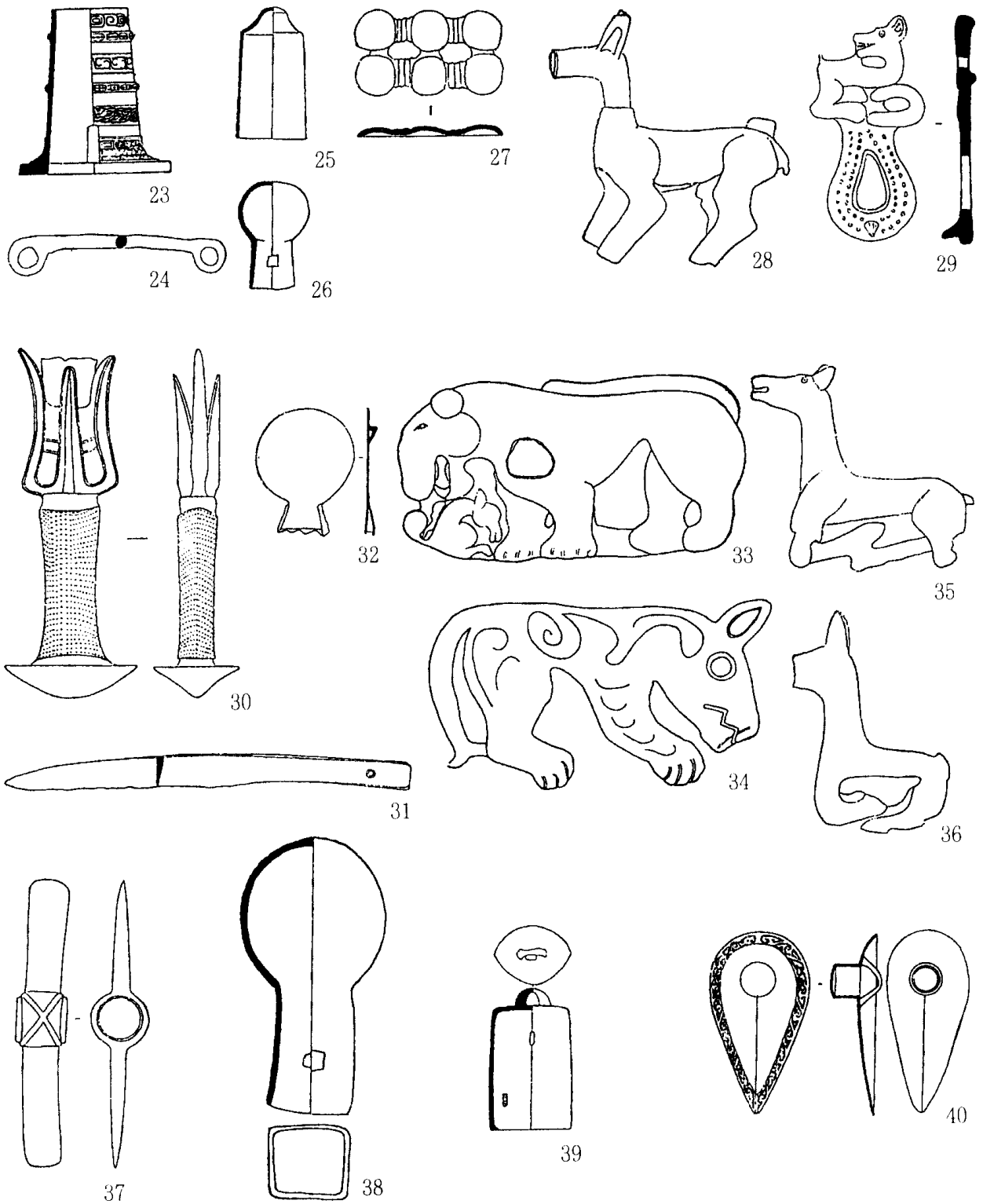


図10 固原地区出土青銅器（4）

23～29：楊郎第1地点7号墓 30～36：楊郎第1地点12号墓 37～40：楊郎第1地点14号墓（22縮尺1/10、24・25・30～32・37・39・40縮尺1/5、その他縮尺2/5）

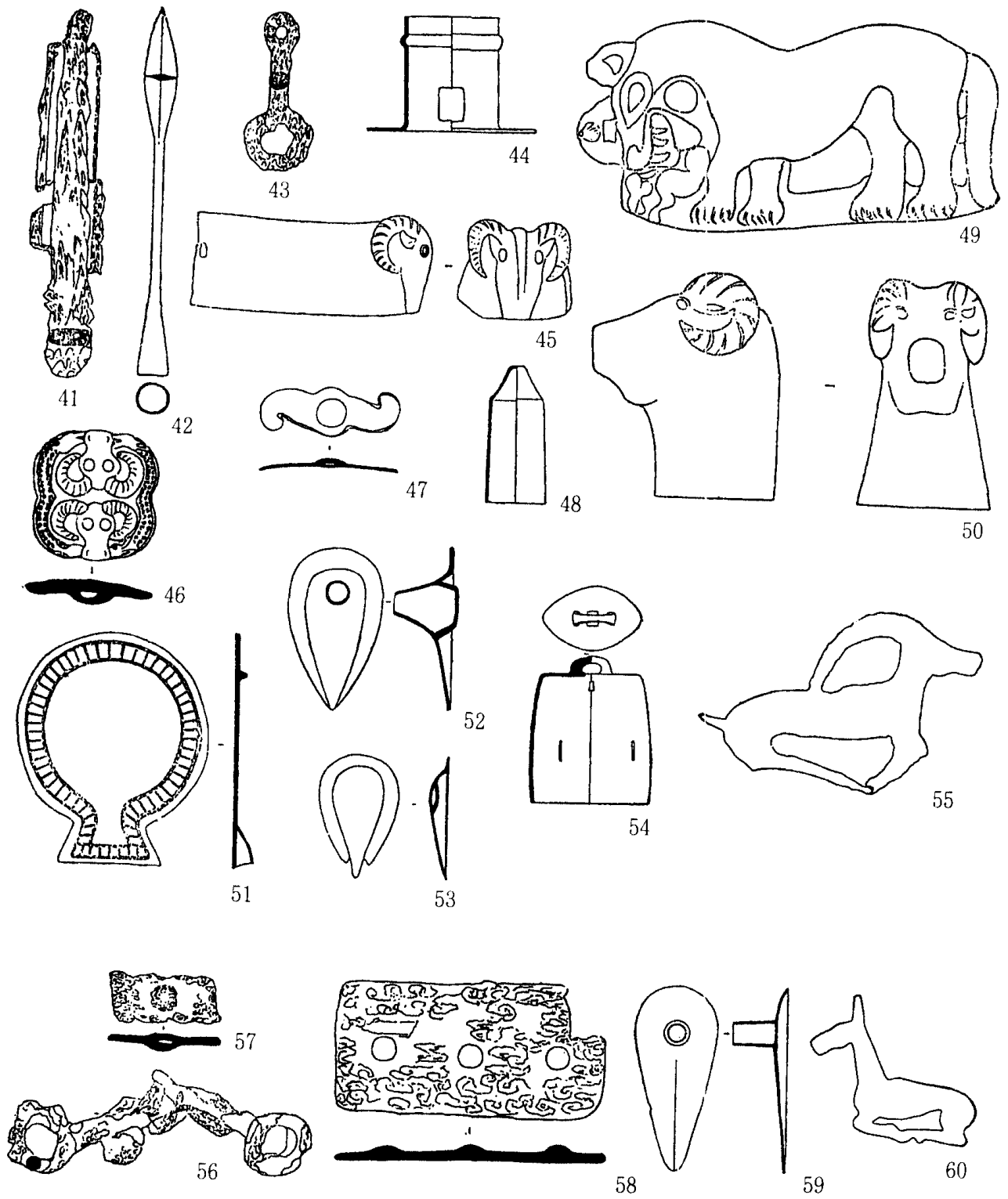


図11 固原地区出土青銅器(5)

41~55: 楊郎第3地点4号墓 56~60: 楊郎第3地点5号墓 (41~45・48・52~60縮尺1/5、その他縮尺2/5)

15) も涼城地区Ⅲ期段階と考えて矛盾がない。そうすると3号墓からは既に鉄剣(13)も出土しており、涼城地区Ⅳ期から鉄製武器が普遍化する涼城地区Ⅳ期より早い段階から、本地区では鉄器化が進む可能性も考慮しなくてはならない。その意味では、3号墓を涼城地区編年Ⅲ期ⅠⅣ期に渡るものと幅を持たしておくべきであるかもしれない。1号墓の鳥形鉸具(22)は尾部の裏面に留め金が付く新式のタイプで鳥形鉸具E式に相当する。この鳥形鉸具E式は涼城地区編年Ⅳ期に属する。1号墓からはこのほか鹿形の立体獣形飾(21)も出土しており、涼城地区編年Ⅳ期併行と考えて問題はない。この鳥形鉸具E式(29)は7号墓にも認められる。尾部には獣形飾を飾るもので特異なものであるが、尾部の裏面には留め具を持つ鉸具E式である。また、その他の副葬品に竿頭飾(26)や鹿形の立体獣形飾(28)をもち、涼城地区編年Ⅳ期の特徴を示している。中原系の車書(23)も戦国中期であり、問題のない年代である。また、12号墓からは鹿形の立体獣形飾(35・36)が出土しており、慶陽地区の検討からすると涼城地区Ⅳ期以降に出現するものである。また12号墓からは鳥形鉸具の形態に似る単柄円牌飾(32)が出土しており、この時期以降特殊なものとして楊郎墓地にみられる。この他、虎形牌飾(33・34)や銅柄鉄剣(30)も共伴している。銅柄鉄剣などの存在からも、12号墓は涼城地区編年Ⅳ期段階と考えるべきであろう。14号墓からは竿頭飾(38)と共に凸管形飾(40)が出土している。凸管形飾は慶陽地区で検討したように、涼城地区Ⅳ期以降に出現するものであり、竿頭飾の存在からも14号墓を涼城地区編年Ⅳ期ⅠⅤ期併行と考えておくべきであろう。また、定型化した銅鈴(39)も、この段階からのものであろう。

楊郎墓地第三地点からは、第一地点の14号墓にみられた凸管形飾が第三地点4号墓(52・53)と5号墓(59)に認められる。凸管形飾は、慶陽地区の検討からする涼城地区Ⅳ期以降に出現するものである。副葬品の鉄器化がかなり進んでいることから、これら第三地点4・5号墓は涼城地区Ⅴ期段階まで年代的に新しい段階のものである可能性がある。したがって涼城地区ⅣⅠⅤ期に相当するものと考えておきたい。

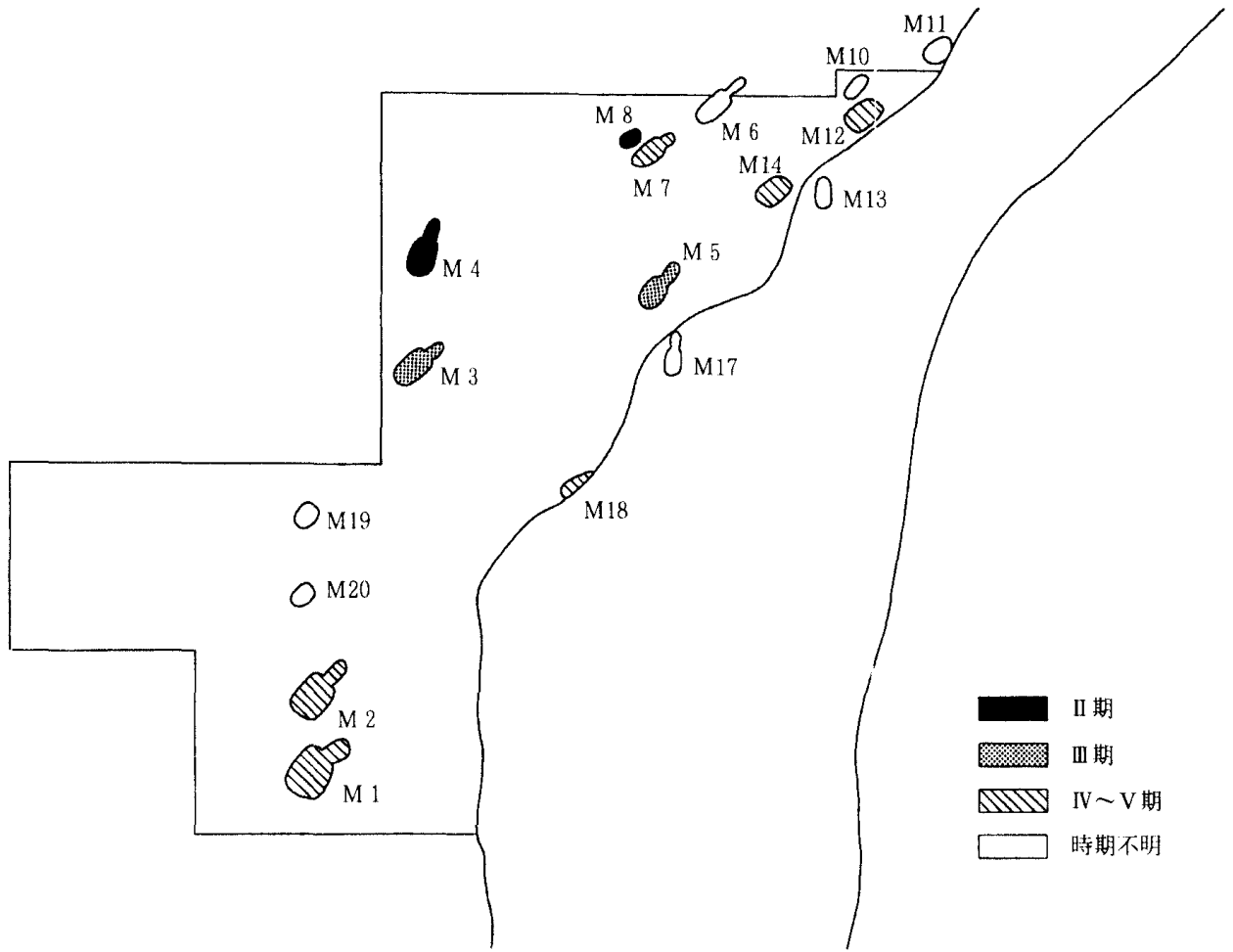


図12 楊郎第1地点墓地の変遷

こうした年代観を基にまず第一地点での墓地変遷について考えてみたい。図12に示すように、最も古い段階は涼城地区編年II期の墓葬は4号墓と8号墓であり、墓域の西北端に位置している。編年上次の段階である涼城地区編年III期あるいはIII~IV期平行の墓葬は、4号墓と8号墓を取り囲むようにその南側に配置されている。さらに年代の下る涼城地区編年IV期あるいはV期併行の墓葬はさらにその南側に墓域が展開している。いわば墓域の西北端から年代を追って放射状に継起的に墓域が拡大していったことが解釈されるのである。その場合、基点となる4号墓と8号墓を中心にそれぞれで南北方向に墓域が拡大するという解釈も可能である。すなわち少なくとも二つの集団単位での継起的な墓域が形成されていた想定も可能であろう。仮にこうした可能性が妥当であるならば、墓葬のまとめやすなわち墓群は、何らかの集団単位を示して

いると考えることができよう。副葬品においては墓葬間に於いて大きな格差は認められないところから、個々の被葬者間の関係はほぼ等質な関係と想定できる。そうすると、こうした集団単位は何らかの社会的な意味を有していると考えらるべきであろう。これを血縁関係を背景として継起的に埋葬されていた集団単位と考えておくのが、最も可能性があるように思える。また、これらの墓葬は8号墓を除き、確認されるほとんどの墓葬が洞室墓であり、先に検討した於家莊墓地と共に固原地域では洞室墓が地域的な墓葬の特質を形成している。

一方、第二地点と第三地点は第一地点に比べ、比較的近接している。あいにく第二地点の墓葬はほとんどが破壊を受けており、完全な形のものはない。その中で、副葬品が比較的残っているものでみれば、A2式銅剣を持つ18号墓が涼城地区編年第三期平行、E式鳥形鉸具を持つ14号墓と17号墓が涼城地区編年IV期平行ということができる。これらの副葬品数などには大きな格差はなく、第一地点と同じような等質的な階層関係を持つ墓群という印象を持つことができる。

ところがこうした等質的な関係に比して、相対的に年代が下る第三地点の墓域では異なった傾向が認められる。第三地点の墓域は、先の年代比定において涼城地区編年IV～V期と考えた墓域である。この墓域の場合、攪乱を受けていない1号墓から8号墓の副葬品ならびに墓室部分である洞室部分の大きさにおいて、第一地点と異なった格差が認められるのである。大型の洞室を持つ4号墓の場合、極端に多くの副葬品を持つ墓葬である。したがって、涼城地区編年IV～V期の第三地点墓地では、社会的な階層格差が広がった段階といえる。この涼城地区編年IV～V期において、固原地域においても社会的な変革が急激に進み、社会集団内での階層構造が劇的に進化したと考えらるべきであろう。

### 三、隆徳地区

隆徳地区では良好な一括遺物に欠け、墓葬間での比較研究は無理である。しかし、出土した青銅器において地域的な特徴が認められる。一九九九年に秦安県文化館を訪問した際にも、いくつかの青銅器を実見できたので、実見できたものを中心にその特徴を述べてみたい。図13の1、2、3は秦安県中山郷出土のものである。報告はなく出土状況などは不明であるが、一括遺物の可能性が想定できる。1の剣は断面が扁平であるように既に実用の剣としてではなく、明器化している。この地域で出土した銅剣には、剣把飾が双鳥からなる典型的なオルドス式銅剣が秦安県王窯公社山王家<sup>(27)</sup>から出土しており、その退化形態が秦安県郭嘉公社寺嘴坪<sup>(28)</sup>にみられる。寺嘴坪のものがさらに退化したものが中山郷出土の銅剣と言うことができよう。これらの銅剣における退化方向とは銅剣が薄く扁平化するという変化方向ではなく、剣の鐔部分や剣把飾の退化という点も、一定の漸移的な変化方向を見取ることができる。また、中山郷の銅剣は全体が扁平というだけでなく、鐔の一部や把手部分が鋳掛けされて完成しており、粗雑な作りを為す。また、同じ中山郷出土の有蓋斧(図13-3)も小型であり、実用の武器とは考えられない。この点は斧の断面が扁平である点においても同様の特徴を持っている。但し、蓋の上下端に穀粒文を配置するなど装飾性を有している。その他、中山郷では銅刀子(図13-2)も出土している。

ところで、明器化した有蓋斧は中山郷以外においても、山王家においても認められる。ここでは2点の有蓋斧が出土しているが、どちらも小型化しており、実用品とは考えられない明器化したものである。図13-4は斧部も中空であり、斧としての強度に欠けるものである。鶴嘴と考えた場合でもやはり強度に欠け、非実用具と考えられるものである。図13-5は同じく小型であり、有蓋斧というよりは刺突具の形態あるいは鶴嘴の系譜を引く可能性があるが、小型化しており実用武器ではない。また、蓋部に新たに入れ子にして中空の筒状の銅製品が



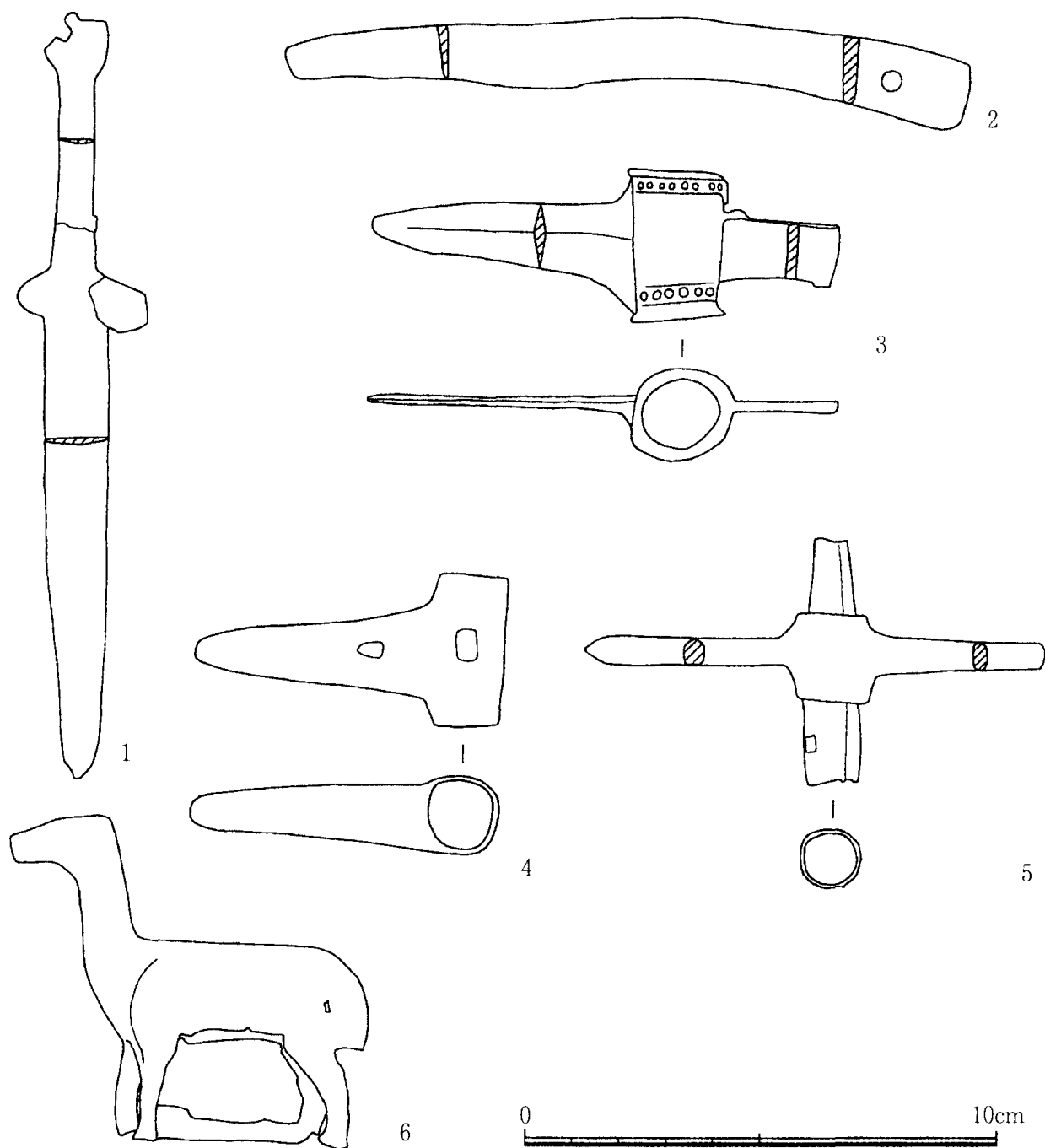


図13 隆徳地区出土青銅器

1～3：中山郷、4・5：山王家、6：千戸公社（縮尺1/2）

入っており、特異な形態を示している。このように、隆徳地区の青銅器文化の特徴として明器化を挙げることができると思われる。北方式青銅器の典型的な器種である銅剣と有蓋斧において明器化が著しい点、この地域の青銅器文化の特徴となる。残念ながら明器化する段階の細かな年代が決めがたいが、銅剣の明器化は少なくとも涼城地区編年Ⅲ期のA2式銅剣段階にはなく、

それ以降のことであり、涼城地区編年Ⅳ期の戦国中期以降のことと考えられる。

また、この段階の青銅器文化によく認められる鹿形動物形飾(図13-6)が秦安県千戸公社<sup>(29)</sup>にもみられるように、隆徳地区としての地域的な特徴を有すると共に隴山地域全体の共通した青銅器文化の特徴を持っている。同じことは、隆徳地区では隆徳県温堡郷呉溝村の土壙墓<sup>(30)</sup>から凸管形飾、鹿形立体獸形飾、馬銜、渦文飾、銅泡、銅鏃などの青銅器が出土していることにも認められる。青銅器の内容から、この墓葬は涼城地区編年Ⅳ-V期段階のものであろう。凸管形飾や鹿形立体獸形飾は慶陽地区や固原地区と同様に隴山地域で共通して認められる青銅器である。涼城地区編年Ⅳ期以降、隴山地域の青銅器文化としての共通性ととも、青銅器の明器化という地域的な特徴が出現しているのである。また、この明器化は埋葬習俗の地域的な特異性と共に、社会の階層分化に伴うものの可能性をも考慮すべきように思える。

#### 四、中寧地区

中寧地区は、中寧県関帝郷倪丁村<sup>(31)</sup>と中衛県西台郷双磧村狼窩子坑<sup>(32)</sup>から青銅器が出土している(図14)。これらはすべて墓葬出土と考えられる。倪丁村2号墓は土壙墓であるが、被葬者の埋葬後その上部に二体の馬頭骨が置かれていた。倪丁村2号墓出土の馬面はこれら馬頭骨付近から出土しており、馬具であることは間違いない。馬面は二種類から成るが、A式は靴底形を呈して人面のような文様意匠が施されている(11)が、B式の方は対面する鳥文が描かれている(10)。両者とも慶陽地区など他地区には見られない特異なものであるが、狼窩子坑からは同種のA式とB式の馬面が出土しており、<sup>(33)</sup>このような馬面が中寧地区の地域性を示す青銅器であるといえよう。この倪丁村2号墓からは涼城地区編年Ⅰ期であるA2式の鳥形鉸具(5)が出土しており、春秋後期に相当する。伴出する青銅短剣は剣把が環状をなすもの(1・2)であり、慶陽地区の紅岩出土銅剣と同じ形態的特徴を示し、

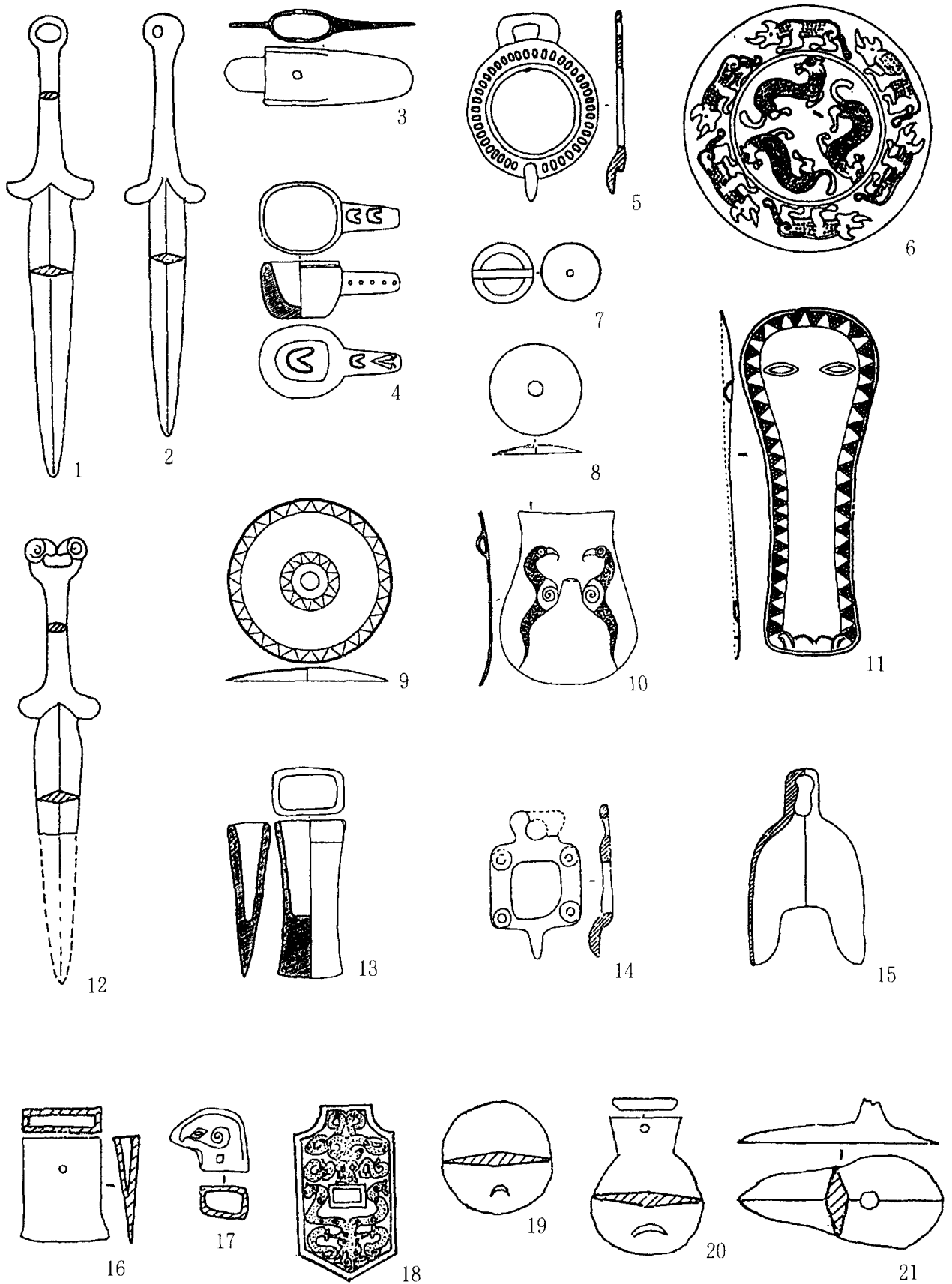


図14 中寧地区出土青銅器  
 1~11：倪丁村2号墓 12~15：倪丁村1号墓 16~21：狼窩子坑1号墓（1~4・9~13・17~21縮尺1/5、16縮尺1/4、その他縮尺2/5）

年代もほぼ同じ段階である。また共伴している銅鏡(6)は獸文が二重に配置されるものであり、類例に山西省長治分水嶺53号墓<sup>(34)</sup>出土の鏡があげられる。この墓葬の年代は春秋末から戦国初期と考えられる。鏡を含めて副葬品の年代がほぼ一致しており、倪丁村2号墓の年代は春秋後期といえよう。倪丁村1号墓は破壊を受けており出土している遺物は少ない。ここからはA1式銅劍(12)がでており、涼城地区編年Ⅱ期に相当する。銅鈴(15)の形態も同じ時期の様式的特徴を持っている。倪丁村1号墓は倪丁村2号墓に後出する段階の戦国前期のものであろう。

狼窩子坑でも11基の墓葬が発見されているが、一部出土の遺物の所属墓葬が不明である遺物が存在している。この中で一括遺物として評価できるのは、1、4号墓である。銅劍の特徴などからは倪丁村2号墓以降長期に渡って存続した墓地であることが理解できる。倪丁村1号墓より新しい段階の墓葬として狼窩子坑1号墓があげられる。ここからは凸管形飾(21)が出土しており、隴山地域全体で涼城地区編年Ⅳ期以降に平行していることは明らかである。また、狼窩子坑3号墓からは倪丁村2号墓の馬面と同じ形態で同種の文様をもつものが出土している。A式の靴底形馬面の文様は倪丁村2号墓のものと同様であるが、下端の文様が若干異なっている。またB式の馬面の文様も向かい合う双鳥文から成るものであるが、報告の写真図版から見れば、倪丁村2号墓のものと違い双鳥文の上にさらに植物状の文様が加わっており、差異がみられる。こうした差異は、狼窩子坑3号墓の方が倪丁村2号墓より年代が下ることを意味しているかもしれない。ともかく、A式やB式馬面はその他の隴山地域には存在せず、中寧地区の特徴となるものであり、この地域の威信財になるものかもしれない。今のところ、中寧地区の墓葬からはその他の地域によく見られた竿頭飾や鹿形立体獸形飾が存在せず、地域的な独自性がより濃いものとなっている。

## 五、隴山青銅器文化の展開

隴山地域を四地区に分けて、青銅器の年代観から墓葬の年代決定とその時代的変遷あるいは社会的意義について検討してきた。ここで改めてこれら四地区を統合して、隴山地域としての共通性あるいは特質を抽出してみた。

隴山地域で最も古い段階として取り上げたのは、慶陽地区の西周後期の馬寨である。しかし本格的な北方式の青銅器文化を持つ段階は、内蒙古中南部と同じ涼城地区編年Ⅰ期段階の春秋時代中頃と考えるべきであろう。しかし慶陽地区としての青銅器の特徴が認められるのは、戦国中期である涼城地区編年Ⅳ期の袁家以降にある。青銅器としては竿頭飾の盛行と共に凸管形飾が認められ、鹿形の立体獣形飾にも地域的な特色が認められる。竿頭飾や鹿形立体獣形飾はオルドス高原地域にも認められるが、これらの主体的な地域は隴山地域であることは、慶陽地区、固原地区、隆徳地区においてこれらが普遍化していることから認めることができるであろう。隴山地域の固有の青銅器としては、涼城地区編年Ⅳ期以降に出現する凸管形飾にある。これは中寧地区にも見られ隴山地域全体に認められるものである。また、この段階以降、定型化する銅鈴も隴山地域の地域的特色を示している。また、銅柄鉄剣や鉄剣などの武器の鉄器化が比較的早い段階から進んでおり、普遍化するのには涼城地区編年Ⅳ期以降であるが、固原の楊郎墓地などでは戦国前期の涼城地区Ⅲ期まで遡る可能性があり、隴山地域の方が内蒙古中南部より早い段階で鉄器化する可能性があるであろう。

また、慶陽地区に限ってみれば、双龍文帯飾りがこの涼城地区編年Ⅳ期段階から出現する。この双龍文様は、長城地帯固有の双鳥文様とは異なり、中原系の文様意匠と考えられる。中原との何らかの文化接触によって双鳥文飾り金具に代わって採用された可能性がある。このことは、慶陽地区ではこの段階以降、戈などの中原系遺物

が多くなることと相関した動向であると解釈される。さらにこの段階の袁家のように墓壙と共に葬馬坑が組み合わせられて一つの墓葬を為す墓葬形態があり、社会構成上の上位者の墓である可能性がある。すなわち社会的な格差が広がり、首長層の台頭を意味する墓葬である可能性がある。同じことは涼城地区編年Ⅳ～Ⅴ期において楊郎墓地第三地点においても、大型の洞室墓とそれに伴って多量の副葬品をもつ段階に至っている。社会の階層格差の広がりとは首長墓に相当する墓の出現が、慶陽地区や固原地区において相次いでみられることにある。同じことは確実な年代や墓葬形態が不明であるが、青銅武器の明器化が隆徳地区にみられるのであり、この現象も社会の階層格差の広がりによる副葬品構成の変化に伴う可能性が想定できる。仮にこの仮説が正しければ、隴東地域全体で戦国後半期には首長層の台頭や社会格差の広がりが顕著になることが理解できるであろう。翻って慶陽地区に見られた墓壙と葬馬坑がセットになる墓葬は春秋後期には出現しており、この段階に中原系の遺物は既に見られることから、中原との接触の中、隴山地域においても社会階層の複雑化が進展し始めていると推測できる。この段階での中寧地区の特異な馬面は威信財の可能性があり、社会の複雑化を示しているよう。こうした背景の中に戦国時代後半にはより社会進化を果たし、首長層の台頭など社会の階層格差が進展しているのである。また、この場合においても、それぞれの地域にはその独自性を保有しており、決してこうした首長間あるいは地域間での統合が果たされた段階とは言えないであろう。

仮に冒頭で記した『史記』匈奴列伝の記載が正確であるとすれば、春秋中期の秦穆公の時に西戎八国が秦に服従したことから、春秋後期から固原地区や慶陽地区において中原系の戈が墓葬の副葬品として組み込まれることと何らかの関係がある可能性がある。すなわち秦との接触の中で隴山地域諸部族の青銅器文化の内容に、中原系の青銅武器である戈が組み込まれることになるのである。一方、戦国時代後半期に於いて楊郎墓地第一地点7号墓の車書のような中原系の青銅器が墓葬の副葬品にみられるのは、こうした秦などの中原との関係からであろう。

さらに、涼城地区編年Ⅳ期以降に出現する双龍文帯飾りも、龍文の意匠は中原のものを採用したと考えられ、長城地帯の内部から生み出されたものではない。しかし、このような関係性は、決して文献記載にみられるような秦への服従を意味するというよりは、この段階を秦などの中原との戦闘を含めた文化接触が本格化した段階と捉えることができるであろう。また、秦に見られる洞室墓も隴山地域の洞室墓の影響であるとする見解<sup>(35)</sup>もあるが、これもこの段階の両地域の文化接触として捉えることができる。

ところで、文献上、隴山地域には西戎八国が存在し、そのうち隴山東部地区で四部族が知られるが、その中で最も注目すべきが義渠である。慶陽地区をこの義渠に比定する研究者が多い。<sup>(36)</sup>『史記』匈奴列伝には「其後義渠之戎築城郭以自守、而秦稍蚕食、至於惠王、遂拔義渠二十五城。」とあり、『史記』秦本紀に「惠文君十年伐取義渠二十五城」とある。これらは秦の惠文王（前三三七～三一一年在位）時期の記載と考えられるが、秦と義渠はかなり激しい戦闘を交えたことになるであろう。先に検討したように、涼城地区編年Ⅳ期以降の戦国後半期に、慶陽地区での社会格差の広がりや首長墓の出現は、こうした文献記載の内容と符合するものである。すなわち、城郭を築き秦との領域紛争を起こすことは、義渠内部での社会的発展あるいは社会の組織化が存在したはずである。墓葬分析における社会の階層化の進展やそれに伴う首長墓の出現は、こうした社会組織の発展を裏書きするものであり、慶陽地区を含む隴山地域において社会構造の発展を物語るものである。

さらに『史記』匈奴列伝では「秦昭王時、義渠戎王與宣太后乱、有二子。宣太后詐而殺義渠戎王於甘泉、遂起兵伐殘義渠。」とあり、義渠は秦に滅ぼされている。この時期は、秦昭王代であるから前三〇六～前二五一年に相当し、戦国後期のことである。さらに『史記』匈奴列伝は続けて「於是秦有隴西、北地、上郡、築長城以拒胡。」と記し、戦国後期には隴山地区は秦の領域に組み込まれ、北方系民族の文化はより北に後退することになるのである。ここに隴山青銅器文化は終焉を迎えることになる。

## おわりに

これまで、隴山地域を慶陽地区、固原地区、隆徳地区、中寧地区に分け、それぞれの地区の青銅器に関して涼城地区青銅器編年を基準に検討し、年代やそれらの特質や地域的特徴について言及してきた。さらにこの年代観を基に墓葬分析を試み、社会の階層化と首長墓の出現時期を検討し、さらに文献の記載との関連の中から、歴史的な評価を行った。隴山地域全体として青銅器文化の類似性も見られるが、その中でも慶陽地区、固原地区、隆徳地区はその類似度が高く、一方で中寧地区はやや異質な独自性をも示している。もちろん慶陽地区、固原地区、隆徳地区においてもそれぞれ地域の特殊性を持っている。慶陽地区では墓壙と葬馬坑がセットとなる墓葬や、固原地区における洞室墓の普及、隆徳地区の青銅明器の普及などである。こうした地域的な特性は、これらの地域が小地域内で政治的なまとまりをもち、相互に交流を持ちながらもこれらが政治的な統一体としてまとまっていなかったことを物語っている。これらの小地域が隴山地域として文化的なまとまりを形成していたものの、小地域間の政治的な関係は拮抗しており、地域間の階層構造が形成され統一体に向かっていた形跡は認められない。こうした中、本格的な青銅器文化の特徴を示す春秋後期には、中原文化との軍事的な緊張を含む文化接触を示し、中原系の文物を入手するとともに、社会進化が急速に高まっている。さらに戦国の後半期にはこうした社会進化が社会の階層化として明瞭に現れ、個人の富裕墓が出現するなど首長墓が成立していく。こうした歴史的な変遷は、長城地帯の個々の社会が先秦期において文化的な統一性を保ちながらも、大きく政治的な統合を遂げないまま、社会的コンプレックスを深め、小地域内での社会発展を示し、かつそこに中原世界との接触が社会発展の刺激を牽引していたことを物語っていると考えられる。



本稿で使用した後荘出土青銅器の実測図の一部は、大手前大学の秋山進午先生、東京大学の久貫静夫さんによるものである。実測図の掲載をお許し頂いた両氏に感謝申し上げます。また、西峰市博物館や秦安県博物館での遺物調査を実施するにあたって、同行し便宜を図っていただいた甘肅省文物考古研究所の戴春陽副所長や王輝さんに感謝申し上げます。なお、本論文は平成十一年度科学研究補助金（基盤研究（C）（2））「遊牧民と農耕民の文化接触による中国文明形成過程の研究」の研究成果の一部による。

## 注

- (1) 宮本一夫「オールドス青銅器文化の地域性と展開（上）（下）」『古代文化』第五十一巻九・十号 一九九九年  
宮本一夫「オールドス青銅器文化の終焉」『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店 二〇〇〇年
- (2) 許成・李進増「東周時期的戎狄青銅文化」『考古学報』一九九三年第一期
- (3) 羅豊「以隴山為中心甘寧地区春秋戰国時期北方青銅文化的発現与研究」『内蒙古文物考古』一九九三年第一・二期
- (4) 三宅俊彦『中国古代北方系青銅器文化の研究』（國學院大學大学院研究叢書 文学研究科六）一九九九年 図一四七を改変。
- (5) 慶陽地区博物館「甘肅慶陽韓家灘廟嘴発現一座西周墓」『考古』一九八五年第九期
- (6) 許俊臣・劉德禎「甘肅寧県寧村出土西周青銅器」『考古』一九八五年第四期
- (7) 慶陽地区博物館「甘肅寧県焦村西溝出土的一座西周墓」『考古』一九八九年第六期
- (8) 許俊臣「甘肅慶陽地区出土的商周青銅器」『考古与文物』一九八三年第三期
- (9) 前掲注（8）文献
- (10) 前掲注（8）文献
- (11) 前掲注（8）文献
- (12) 甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」『考古学報』一九七七年第二期
- (13) 劉得禎・許俊臣「甘肅慶陽春秋戰国墓葬的清理」『考古』一九八八年第五期
- (14) 前掲注（13）文献

- (15) 前掲注(1) 文献
- (16) 田広金「桃紅巴拉墓的匈奴墓」『考古学報』一九七六年第一期
- (17) 宮本一夫「中国古代北疆史の再構築」『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店 二〇〇〇年
- (18) 中国社会科学院考古研究所『澧西発掘報告』(考古学専刊丁種第十二号) 一九六三年
- (19) 雛衡主編『天馬—曲村 一九八〇—一九八九』科学出版社 二〇〇〇年
- (20) 慶陽地区博物館・慶陽県博物館「甘肅慶陽城北発現戦国時期葬馬坑」『考古』一九八八年第九期
- (21) 寧夏文物考古研究所「寧夏彭堡於家莊墓地」『考古学報』一九九五年第一期
- (22) 寧夏文物考古研究所「寧夏固原於家莊墓地発掘簡報」『華夏考古』一九九一年第三期
- (23) 寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館「寧夏固原楊郎青銅器墓地」『考古学報』一九九三年第一期
- (24) 内蒙古文物工作队「毛慶溝墓地」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社 一九八六年
- (25) 前掲注(4) 文献
- (26) 前掲注(17) 文献
- (27) 陝西周原考古隊「扶風劉家姜戎墓葬発掘簡報」『文物』一九八四年第七期
- (28) 秦安県文化館「秦安県歴年出土的北方系青銅器」『文物』一九八六年第二期
- (29) 前掲注(27) 文献
- (30) 王全甲「隆徳県出土的匈奴文物」『考古与文物』一九九〇年第二期
- (31) 寧夏回族自治区博物館考古隊「寧県中寧県青銅短劍墓清理簡報」『考古』一九八七年第九期
- (32) 周興華「寧県中衛県狼窩子坑的青銅短劍墓群」『考古』一九八九年第十一期
- (33) 劉軍「中衛出土春秋青銅飾」『考古与文物』二〇〇一年第二期
- (34) 山西省文物管理委员会・山西省考古研究所「山西長治分水嶺戦国墓第二次発掘」『考古』一九六四年第三期
- (35) 前掲注(3) 文献
- (36) 前掲注(3) 文献